
布団の上の童話

ざっこくごはん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

布団の上の童話

【Nコード】

N4169Z

【作者名】

ぎっごくごほん

【あらすじ】

西洋諸国に追いつけ追い越せと、鬚も刀も取り払い、土壁を突き崩し、赤煉瓦を積み上げ、亡者のようにただ先も見えぬ道を邁進した明治の世は過ぎ去り、空がじんわりと嵐の色を滲ませはじめた。／＼変わりゆく時代の中で取り残された男と女中の話。／blogに掲載済み

ああ、日が暮れていく。

西洋諸国に追いつけ追い越せと、鬚も刀も取り払い、土壁を突き崩し、赤煉瓦を積み上げ、亡者のようにただ先も見えぬ道を邁進した明治の世は過ぎ去り、空がじんわりと嵐の色を滲ませはじめた。

大正三年。第一次世界大戦始まりの年である。第二次西園寺内閣下の日本財政は悪化の一途を辿って行く。いわば、これより長く続く嵐の時代の前哨にあたる年であった。

しね。しんでまえ。

M子が男にあつて初めて言われたのがこの言葉だった。遠い田舎から、口減らしと借金の肩代わりにと売られてきたM子は、今までこのような激しい言葉をぶつけられたことは無かった。いつも厄介者を見るような目でM子を見ていた両親でさえ、死ねとは言わなかった。故に、M子は告げられた言葉の意味がよく理解できず、おずおずと田舎くさいもごもごとした声で聞き返した。

「しねって、おらさにおつちねいうことですか、わがさま」

ぐずぐずの訛りのきついM子の喋りに、男は一瞬驚いたように目を見開いて、それからぱしんと一発。M子の頬をはり、バカにしたように鼻で笑った。

「ああ、そうゆうこつちゃ。はよう死ぬ。死んでまえ。薄汚い乞食女。早よう死んでまえ」

どうして、とM子が考えるよりも先に、男から弾丸の様に罵声の雨が降ってきて、M子は何も言えなかつた。

そればかりか、長い髪を鷲掴みにされて、廊下の外へと引き釣り出されてしまったのだ。

M子はその日、どうする事も出来ずに、日暮れの頃、女中頭が様子をこつそり見に来るまで冷たい廊下で、びしょりと占められた障子を見上げて過ごしたのだった。

男は帝大を卒業した後、高等遊民となつた典型的な裕福な良家の息子だった。

しかし、それは表向きの話でしかなく、実際は肺血を病んだ為、世間体を気にした両親によつて堺の実家へと連れ戻され、軟禁されていたのである。昭和の中期まで肺血、いわゆる結核は不治の病であり、遺伝性の病とされていた。肺血の一族と言われぬ為、親族の中から肺血の罹患者が出た場合、その存在を隠すのは当時においては珍しい事柄では無かつた。とくに良家であればあるほどそれは顕著であつた。

そして、例に漏れず、男の家もまた男の存在を隠すことにしたのだ。

しんでまえ。しんでまえ。さつさとしんでまえ。

毎度の如く癩癩を起こして投げつけられた粥と椀が畳に染みていくのを見ながら、M子はノロノロと布巾をとつて、着物と布団と床に付いた粥を拭き取っていく。この一杯の粥があれば、郷の幼い弟や妹たちは餓えずにすむだろう。そんなやり切れない気持ちに成りながら、唇をかんで、ただ黙って床を拭き続けた。

「なんやねん。なんやねん、その目えは」

M子の瞳に宿ったやり切れない色を目ざとく見つけた男は、容赦なく、病で瘦せたとは言えども、まだ十分に力のある足で、M子の手をぎゅうぎゅう踏みつけた。床と男の足の間に挟まれて痛む掌に、M子は涙を止める事が出来なかった。

「わかざまあ、痛えです。わかざまあ、はなしてくんなましい」

このままじゃあ、おらの手は折れちまって、仕事ができなくなります。そんだったらここをおん出されちまいます。どうか、どうか、足をどけておくんない。涙と鼻水でぐずぐずになった醜い顔で哀願するM子の姿はこの上なくみつともなく、醜かった。

「おまえは汚い豚や。野豚や。そんなに粥が惜しいんやったら、ほんまの豚のように這いずって、すすったらええやろ」

きつく結び上げた髪を始めて会った日のように驚掴みにされて、顔面から床に叩きつけられる。どろりとした生暖かい液体が鼻の奥から流れていくのをM子は感じた。M子はどうしても、こんな目に会わなくてはいけないのか解らなかった。

「どいつもこいつも、馬鹿にしたような目で見よってからに。なんやねん。僕が帝大に入ったときには、若様若様いうて散々持て囃しといて、肺血患うたら汚いモン扱い。こないな離れの部屋にみつともない田舎女の女中を一人つけて押し込めとくやなんて」

ああ、嫌や嫌や。どくどくと鼻血が溢れて止まらず、床に突っ伏したままのM子を尻目に、男はぶつぶつといつもと同じように愚痴を吐き、苦しげな咳を二、三度した。

「いつまで寝とんねん。はよう床掃除して、新しい布団ひかんかい」
痛む手と鼻を押えて蹲るM子の旋毛を爪先でちよんと蹴って、男はまた、苦しげな咳を二度、三度と繰り返した。

昔からこの家に居る女中によれば、元々は少々世間知らずなところが有ったものの、男は気立てが良く、優しい人間だったらしい。しかし、病に罹患してからというもの、人が変わったかのように我が儘を言い、癩癩を頻繁に起こすように成ったのだという。そんな男の暴挙に耐え切れず、多くの使用人たちが男の世話を嫌がった。結果的に、田舎から売られてきた何も知らずとろくさいM子が男の世話を一手に任されてしまったのだった。

男の暴挙は病が進むに連れて、止まるところを知らぬように激しくなっていくた。

「ああつ、この薄汚いめす豚が。はよ死ね。死ね」

そう散々なじられながらM子が男に罵られ、犯されたのはもう二度や三度の話では無くなっていた。屋敷の人間たちはみんなM子が酷い目に遭っているのを知っていたが、誰も何も言わなかった。この頃になると、男の居る離れを、一種の神域、正しくは忌み場として、災いを蒙るのを恐れ、何が起きても知らん振りを続けたのだ。だからM子は逃れる事も出来ず、誰かに助けを求め事もできず、ただ、「ごめんなせえ、ゆるしてくんせえ」と泣きながら、暴力と陵辱の嵐に耐えるしかなかったのだ。

病で痩せていく男と共に、元々細かったM子もまた、心労でより痩せていった。

目元には疲れた老婆のような隈がくつきりと浮いていた。

「おまえ、灰被りの話を知つとるか」

ある五月晴れの日。いつものように殴られるか、はたまた茶碗を投げつけられるか、手ひどく犯されるか、一体どれであろうかと、怯えながら、疲れた体に鞭をうって部屋に入ったM子は、いつになく穏やかにそう問いかけてきた男に動揺が隠しきれず、すこし上ずった声で、知らないと答えた。

「ほんまに物を知らん奴やな」

あきれた様に言った男は、ぼそぼそといつもの愚痴を言うのと同じ声色で、継母達に苛め抜かれるものの、最終的に大きな幸せを手にする娘の話をM子に語って聞かせた。そのあいだ、男はいつものように怒鳴る事も癩癩を起こすこともなく、ただ淡々と話をした。

「おらも、はいがぶりのように、いつか幸せになれんでしょうか」

話を聞きながら、ぽろりと思わず口から出てしまった言葉にM子は真つ青になつて口を押えた。前に一度、男の許可なく質問をし、こっぴどく殴られ、その後七日間は耳が聞こえなかったのだ。

恐怖に顔色を失くしたM子を一瞥した後、男は何事も無かつたかのように話を続けた。男から暴力も罵声も飛んでこない、M子にとつて最初で最後の日だった。

それから月日が経って、とうとう男は自力で歩くことも出来なくなり、桶の中にM子の力を借りて用を足さねばならぬほどに成ってしまった。男は朝晩関係なく情けなさから泣き叫び、癩癩を起こした。しんでまえ。しんでまえ。しんでまえ。しんでまえ。うわごとの様にM子が目の前に居ようと居まいと呪いの言葉を吐き続けた。

血反吐を吐き、胃液を吐き、呪いを吐き、絶叫し、涙を零し、また怒り狂った。

起き上がる力も無く、芋虫や餓鬼のように布団の中でもがきながら、男は子供のように泣いていた。

「ああ、もういやや。もういやや」

苦しい。苦しいと熱にひび割れた唇を動かして、男はM子に言った。

夕暮れの橙に部屋が染まっている頃だった。

目が良く見えないのか、手探りで伸ばされた男の手がM子の手首を掴む。そのどちらの手首も枯れ枝のようだった。

遠くから見たら、自分たちは影法師のように見えるのかもしれないと、疲れきった頭の片隅でM子は思った。ぼんやりと橙色の光の中、細い細い影が壁に映っている。

「なあ、M子」

「あい。なんですかわがさま」

かつてM子に散々暴力を振るってきた手は弱弱しく、簡単に振り払えるものだったが、不思議とその気にはならなかった。

代わりに骨の浮いた指にゆっくりと自分の、これまたやつぱり骨の浮いた指を絡ませて優しく握った。酷く穏やかな気持ちだった。沈んでいく夕日も僅かに聞こえる呼吸の音も、すべてが心穏やかだった。

「なあ、M子。ぼくといつしよにしんだって」

ひゅうひゅうと鳴る、苦しげな呼吸の合間に告げられた言葉に、

M子はちいさく息を呑んだ。そして、ぼろり、ぼろりと溢れてきた涙を拭って、彼女は顔をゆがめて微笑んだ。
たぶん、自分はこの言葉をずっとずっと待っていたのだとM子は思った。

「あい。わがざま。死にましよう。一緒さ死にましよう」

最初に最期の、一番美しい笑みを浮かべて、M子は泣きながら微笑んだ。灰被りには成れなかったけれども、自分はきつと幸せなのだ、と。

終

(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。
ご意見等いただけましたら、うれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4169z/>

布団の上の童話

2011年12月14日12時52分発行